諸國奇談

東遊記後篇

二

ル 3
475
4

西右衛門
上田山吉
第十四 絲下

儿宮 3

東遊記後編巻之二

南谿子著

龍燈

越中新川郡小眼目山と云る寺あり眼目山とまをく サツシワ山と唐ゑまをすはかり深宗旨を禄ゐして道元禅師の弟子大徹禄師の開基なりは大徹禄師出城居まつり時山神龍神助力して多くの奇特あり今ハ毎年七月十二日ハ釈ハ眼目山乃麓の松林梢ゑ燈火のぼるきらハ立山の絶頂より龍来りきたりハ海中より龍来り皆松乃梢ゑとゞまる是ハ立山龍燈龍燈といひくハわいろの人を例年乃事乃事ゑ世ゑ龍燈とて海中より火

のあらハ為ちしとも此寺のごとく心地悪敷を皮小寺
く松乃梢小為るハ希有乃なりとぞいふ越前の敦賀へ
著とゑの庭ゝも荒地の松とて例年正月元日の夜ハ
ゆくゆあるとをもゝるの人ハ結ぶ者なり

新潟

越後国新潟ハ信濃川ゑゑの川ゑ為合く海小入来ゑり海
口をくのゑ武里乃所ハ川幅廣き事ゑ武里亦里ゑり海ゑ
とゝこ船のごとく入り海のごゝ岸ゑり峯まで水ゑ深く
海底とゝるめ千石弐万石の大船とゝゞもゞくまて
も自由小出入りを為小川深ゑて八日市第一ともゝゝ屋ゝ

川幅の廣きも天下ゑ数ともゝゝ此所伝流りとゝゝて
此川の水ハ信州犀川続屋川ゑて来ゑ為光寺の為ゑも
既小海ゑ天竜川程の大流ゑりゑ為ゑ新潟ゑて海ゑ
十里程為くゑ間大小拝川ゑ流ゑ入ゑゆゑ為くゑゑの大流
と為りゑし城ハ地勢平坦なゑゑ為ゑ流ゑ為ゑて流
ゑりなゞゑりゑ為ゑり越ゑて河堤ゑ為く皆二ゑ土ゑ為ゑ
川の為ゑを来小て崩入り次第ゑりゑ為ゑ
ゑ小大小為ゑゑゑ為ゑ水ハ常小黄色小濁ゑり余ハ三
為ゑとゑ下ゑり新潟ゑ十里の和流伝流りの流為ゑり為ゑ
ゆゑ此川の休委敷尺為ゑりゑ為ゑ為の減下ゑり小新潟ゑ十

六里と四百石橋袖の川舟常に一日に上下を通ず運漕に使利なる事也海内又かゝる川なし大なる事日本才一なるに名高きゆゑんは北陸解遠の地にあるて舟に乗川幅ひろく奇妙なるゆゑなるべし金彩浮乃町より又小舟にて里こく芝田の水路とつゞく所を里程に成て川の入江くゝ信濃ひろく柔しふる習慣に成ハ武里に終るとあり狭く入江にて繰に武三十町の所をあり長ハ本川筋にあるゆゑあり流れ高瀬うして流れざるごとし十日ほど晴天にて両岸の景色うるはしく入江くに小蓮の豆に成る毎月夫水面一様の花にて見事なる事いはんかたなし彩浮の町より無底浮光

荷華と黄〜又ハ紅淳なる花蓮華と云ふ船中より四方絶景に成て遠くふかき東に六七十里と見渡して前に西に八武地の里の小佐渡島見ゆ方に奥州會津の山見ゆるかぐのごとく四面に開きさる地無て北海の廻船出入乃大港なれハ城後才一の繁華の地にて商賈多くして富ふ又城後一国の第ふ所に湊ふ所ゆゑ法大名藏多く建ふ所西國の事ゆゑふ家の造ハ中の様式にて舟の通行陸地を西澤に海くハ十月より三四月ハまてハ風波を出る事あさハ少し夏一季住べきゆゑといへべし

三馬屋

奥州三馬屋より松島の海の津まで津程領分ゞ廣小あるゝく
日本国の浦うらのうつくしき海義経ゆかりの鐘岩のごとき蜑屋の海
らんと此所を眺めるあひ〻小波ろぐき順風のうつくしかりしかは数日逗
留あるうちたくさんまさく正勝の歌青の像と海辺の岩のと
ゝまるく蛭風ゆかりのうつくしき忍風ゆかりの恵なく松島の此小波
里のひめ三像今小山形の寺小あるうて義経の風初夏の
歌吉といふ又波寺深小大明日岩あるうて馬屋のごとく穴三
ゝ重ゝ岩義経のる、此立あるのり小ゝと見ゆるうて此て
こゝる屋と称ゆるとゝ此初出ゆるうて松島海と十里あるうゆる三
る屋のあ小南まくタッピとゝ突出るゆるうゆる見ようる七

里ゆるうゆるうゆる松前くの海海八浦三ゆる屋ゆるうゆる
海やたやゆるうゆる海中小ゆる大海のゆるうゆる海ゆるうゆる海
藤三藤あるうゆる武蔵タッピの海海ゆるうゆる海中の海と云北蔵
白神の海と云皆悔小洗ゆるまゆるゆる流ゆる海ゆる海ゆる海
藤イ中里ゆるうゆる屋夜ゆる嵩小あゆるうゆる東南海ゆるくサ
ゆる引住来ゆるくあゆるゆる海中小三ゆるの大海ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
しゆるの方松前の紙紙と武蔵のヲコペのゆるゆる海ゆるゆるゆるゆる海
合ゆるゆるゆる藤と藤ゆるゆる東ゆるゆる海ゆるゆるゆるゆるゆる松前三ゆる
屋の前の海屋ゆる大ゆる嵩ゆるゆる海三ゆる海ゆるゆるゆる
ゆる松前ゆる海ゆる紅ゆる武蔵の呼風の海時と尺合ゆるて帆と十

名に依り件の汐の流れに玉色ハむかしの杦城海中へ抛入て
こゝを神に矢を射るごとく横に截切る事なりとぞかし
もしくハ風たがひ時ならバ汐に押流さるゝなりとそし落さ
るゝ時ハ五十里程も汐に流れて大海へ出て
汐の勢ひすこしゆるみて船をとゞむ事早里より
前方にて船を留る事ハ人力にハ及ばれバ之を汐ハ神に
も見るごとく常に西より東へ落るのまゝにて其理解しがた
き事也かくのごとく此所に来し我も松前へ渡らんと三馬屋
に来りし逗留せしかど順風なくして渡海もせずして彼
是の多く船風なき事しもあり又二十日三十日も順風待さ

る事あり其しゆゑに反ツテ此渡海にてハ常より難船少しと
云南部の田名部のサイ或ハヨコペの邊より松前の箱館さ
ハ近くして天氣よけれバ海路隔て晴れの日にしてあるも
見ゆると云南部のサイヨコペの邊ハ三馬屋よりもちかく
松前へ出る地なり三馬屋より北の方に藍のごとくにさし遥
に見ゆる是蝦夷地の山といふ又田名部のヨコペの邊の山なり
といふ事も實に日本の東の涯なれども漢にあたる
夜他國の人なる所以なりとぞ

狐の義理

越後村上の在に百姓夫婦に娘二人持てり天明己年

の事なりしに乗船に嵐荒く起りて船こわれこのひとりとばされ
て仮ふまじく嵐に飼ひ武三足を取りて座先に投げ打
ふこと数を知の孤乃子あらく彼嵐に食ひ尽ふこと
さんざん嵐のなごみ孤ともに毒にあたりて死ける親孤生きの乃
ある孤大に恨こ婦姫に元付くきくしうこと口ぐせ
粮日あるくはひ中死をり又三次の姫ひとり付く共一月
はうの乃ふこ人の姫死しぬるバ父母を歎き悲しこと親
座先に立ちくしひくろ嵐と投げ打ふ海乃ふ中へ数さん
とのゆかあぐるに海乃ひさぼう食ひて死しける
是元来海乃のあるの乃ふ孤は方の赤ぐさのゆふん

ゆ中方の蒙子三人まてと云数すとはいへる事ども高坐
ちこなりあるの事なるに恨ひとちもあるふ彼親孤は
乃沖ひとちまし中を和豆晩座先ふ老孤ふ足死し居
ひ百姓夫婦先沖ひく咲ひ方ひ恨とひし乃理
ふを知ひまかくぐひひ死しひとひ石伊のひぐ
なりとなりさはひふひとひ中を言孤親じ夫婦ひ利繁
十四兎と賣り泉書と拵ひ豊和豆咲れるあひ春を
者世ひ人も来ひしと孤は雨ひ世ひ乃ひあひひもし出
付ける

後河名

奥州南部の地は日本東山の極りゆゑ狩野鄙にうつれ
どもこゝに人王四十五代天武天皇の御宇に神仏和伝で統中伊勢を
神宮と崇く伝じいるゆゑ今こゝの男女とも京言をゝ
ぶるゆゑ今茶器を和こくするゆゑこの物語ふ我
祖父代に陸奥と名付といふ余と親戚にて我と称とする
方の父のいふを見がるゆゑ名乗るゆゑ陸奥の父祖はいか
なる氏姓の人なるとゆひしゆゑ答へて此名を付給
中来こゝに行き基ゆゑ祖父藤原宮とこゝの道をゆゑ陸奥の
第名五風と呼びなるゆゑ陸奥よりきはゆゑ
とゝひなるゆゑてのほゝも牧彼ゆゑ

つゝゝの名称陸奥と付く一説に陸奥我父を本と父の名
なきゆゑ陸奥と名付めゆゑ基と又陸奥と名付べきと
立和の伝説あゆゑ大なる名ゆゑ言いるゆゑ
又陸奥とゆゑいゝ余を見えゑゆゑ
せう陸奥ゆゑ基ゆゑ彼地の興ゆゑ
めへ〳〵

三本吉郡

支南部の地は廣大無邊ふゝて行もの東西へ
地の廣さ示すべき和なし陸奥七の戸名ふゝ本吉郡
いふ郡あゆゑ兵年たゆゑ基ゆゑ四方用ゆゑ

今一山系南北二日路程あり高さ五千尺ほど
樹木を一本こゝに見えず実に霊の聖所也
西南の八山系の人とも四方ほど周囲十里ばかりあるべし方角
知れず五七日を往来すれども半ばにて迷
といふ所ろ七の戸を来るほど五十丁道四里まあり
東西の往度し山所を只一面の芝原山所ばかりし
八四方の〳〵尺ゆる西に八ツ幸田山あり西ほ八十二四里弧
隔て〳〵二の戸嶽尺西南東廿里計と色〳〵八戸嶽と
四又道の南五十里隔て〳〵盛岡の岩鞍山尺西かくのごく
四方絡然として数百里一望ほ帰し廣遠なる大海と

中ろ〳〵右岩鞍山尺ゆるして三紀の廣手ちろく見物山
のるるまとこ〳〵又一戸ろ沼宮内まて一駅の宮乃中
祀ほ山系七里ゆりろ和ほ布ろ布人屋〳〵もくるの
繼ぎ和他のほろ尺あ〳〵全体計色人民おあり地よ
を北狄田名狄といふ田名狄の他ハ高ろ千石のし狄ほ田名
狄の他乃北海へ出ろ高ろ千里計とあるし見ます
中国西の一ろほの他面ろ廣し狄ほ高ろ狄ほ
人と云ものく〳〵民のほろ民知ろ人〳〵想ほ南狄の他ハ海廣く
廣く平地と右と云〳〵く廣夏那ま行新ほ開さ〳〵ほと
ろの田畑ゆ千百万石とのく〳〵品物ゆ出ろ人民ろ〳〵

て蔵財絶ふ拾万石の地と定らるゝ土地は衣
肥なり民耕作の人多くして皆一戸三人戸五人戸七戸八戸九戸那色地とて戸の字の付たる地多一戸ノ字と唱へて信濃三里或は七八里と隔て山に掘り川を渡り嶮岨の地に八城塚と云ふ今ふくも戸ノ字の付たる和ハ皆断絶して姫古姫夷と唱へ関所等なりやうに見れども今ふ多くて地名の付たるものゝ多くは南北の地なり北の所なり又南北の地は今も六丁或は里と云ふ金銀銅鉄石の類多ふ或は廿里三十町里拾ひしふ話しが溪ふ八到く掌ふ為ふ

平なる所ふ付て多ふ家ノ在て多くしてあり〜〜
南北の地なれども一日に七八十里或百里を経行せり事〜
なりさ仙台領津軽領も南北ふ長く増ふ多く六丁或は
里ト云六十丁或大道を里と云ふ地の〜〜ふ里数を分ら
ふ三人大道ふ出ふ多くひく或里あり或は若ふ趣ふ面白
風ふ多事多〜

綿木

綿木の古沼ハ東北領と津軽領との境小溪と云ふの名
山あり山ふ多くして東南の方へ流れて入ふ多ふ
三沼ふツキと云ふの橋あり此ふ大木ふ多き事

ばうつのうつ四の年いかの小雷火にて三条焼失そうろく
又南部三ノ戸のあの方の在中より移来の古仏として迎見
使のごとく見の地あうと云伝まろ陳の古仏なるうを拝
名所古跡之伝長部うろ上方の絵小高あり　はせ長部八
ゆー新羅の國にても軍留多八古人の遊びしまを形しく
尺西品面りそ人八極多の絵小も遊びしまを外ゲ演宗
当の和分ばまうこれの名所片絵小陳絵聖者初多天
りこの墨出絵本の塚あど計之本の書の碑世面の西川
ゆど片面紙の内と云南部は鹿秋田道八むりー八皆者
人の伝あるうもうと云山武百年計こてハかく

金く日本の名とあもうといふ人あう

龍鱗

越後国魚川の近在黒姫山の麓姫川の岸小水隠こて
大なる岩あり中に長年姫川大洪水の時あり小く流
獺帰彼岩の色へ小ー小行くへ初こて白く滑ある勝の
でくさ和多く付居ち又岩の角の所小大なる鱗こと
ものあ方後付ち主人さ方ばうあう行ある洪水小
押おさ和ばうて出岩角小陳くそりく鱗為ち脂多
まちあ人ー後姫川八鱗のごくあるち尾るで大ゆる
しい主洪ろの時ハおいるあるものを押尾さくー後

梳師てまかうを取りて今に珍せり人皆龍の鱗といふ

蚌珠

此うち何を取りても珍しき物なれども殊に珠とりて世に賞し玉ふ
しかり卞和が玉合浦の珠などといひ伝へ名高き玉を
見聞せし事は世の宝として君子温潤の徳
なぞらへ玉を珠といふ我朝には昔より様々の名ある玉を出す
す神代に曲玉ありしが今古墳より堀出せると見る所に様々
珠璽を以て御称とせり又珠玉を産出せる山川ともやみなれ
只越後に在る所の新潟の人の語りしハ此辺にもあらく
小稲浮といへる所にあり此湖に珠とよぶ貝あり

大さ二三四尺にもなりて殻ハ何れも一つの貝の口
を開きて後大きなる光をあらわし見るに暁の朔
星のごとく光明赫奕として水面にきらめく人
是を見て時に忽ち其光に水底に沈む或ハ是を開き
取らんとて船を寄せて漕ぎ寄せるに其貝の底に行方
見えなくなりも二三寸の間に様々八月の頃に足
留めの事こぞりて貝にもなすものと
らずして見るに取らんとすれども事叶はずして又あまたの貝を見る事なれバ
八十の貝といへると云ふ唐土にも此の浮珠
其を浮珠といふなり

此潟湖浮といひて潟は甚だ広大なる浮にして竟り六七里
ばかりにて江州の湖水とも比するべしまた蓮倉浮豆蓮浮
なる所所浮なといひて潟のほとりに浮なりの高あり此
西にて出羽の国の出羽の庄の内の庄内の地に入りて海に
入りて海の西方へ流れ入る是潟此
ほとりにて海の方へ流れ入る是潟此
六里四方なるもの此の地狭くして廣き所なる
土地なるべし あきの川なるべし

中にて庄内なども拾遺に孝子の小洞を潟に掘て
と湖と云者則潟の浮と同じ所なり皆長江小後
湖の中の方の地に小高あり山多く険岨なる
小黄河小湖の中に日和山あり此の所の
なる所の八郎潟常陸の霞浦抔の似たるもの
なる又あり

養軒の詩

鬼怒川の波浪尾國の雪羽州の鬼怒の銭湯をかす
辛万吾身の上を先き事度くなるしるべ該中の艱難
ひとりひとりの事を思ひ召具を苦労もせしう

[illegible]の[illegible]の花のかく或夜の中の[illegible]
[illegible]くとも[illegible]くべき海とおもはれ[illegible]の谷
川と流浪のあとを[illegible]多くの[illegible]
[illegible]あすの途さへあんじ[illegible]眠らんとすれども[illegible]
しもりして初[illegible]ハ去年の秋[illegible]
[illegible]里ハ六七百里[illegible]程と[illegible]
[illegible]年老[illegible]る父[illegible]今[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

相携千里遠京畿旅館夜深燈影微
窓外杜鵑聲切切請君細聽不如歸

[illegible]文字の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

異ものゝ小いさく人小わらぐしに能倦小乃ゆゑ才一大陸の恐
しいさく人小浸タべ一切薬百千里の彼程をいん弱さ者
呉弱さ者あ病の悪詰あ一平吾といとの看わ一
大酒する者いつ一狂乱なるものゝ一こと父母愛ゆゑ老いの
一甚迷ふ一さでる者いつ一見留の事と思う笑い異て
へこい老ゆゑ猶一一死絶の時は城中より来り居一文彩
とゆいまゝ此異とけ成ハ日向より来り居一龍彩と異と
是此芸彩ハ金ら高絶ゆ一一肥後の球磨ゆてあ一とせ
一ま井伝深寺の家小儒学師りの為小来り居りは
ゆ十日ゆ日同居ゆ一クバゆ一ゆ乃ゆとあ一ゆ人ゆ余ら

ま井と達一ゆ一ゆ時芸彩後ひまゆ人とせ一ゆゆ文
日向ゆよあゆく一ゆゆ漫遊の事とゆ一ゆ一ゆ東
郎小一ゆ一ゆ他邦小移ゆゆ君父小不孝一て所
小従ふの乃ゆゆとゆ一ゆ小強小伏一て肥後小移ゆ置ゆ
三度養彩日向小帰ゆ事ゆ父小逆ゆ御会ゆゆ一ゆ
一ゆバ父玄誠怒ゆゆ汝一ゆみなとゆ一ゆ一好事ハ悪
ゆゆ一ゆ乃ゆひ一ゆ一ゆ時ゆ一ゆ九州ゆ四国ゆ押
流ゆ物ゆ乃の切と接んゆゆ乃父ゆ怒ゆゆ母ゆ一ゆ一封
の書ゆ一ゆ小送ゆハ何と我許一ゆ待ん主君ゆ一ゆ一ゆ
一ゆ一ゆ所ゆ一ゆ彩ひ乃ゆ肥後小移ゆゆ四国ゆ流ゆゆ

えもいのいろ四のあし車は同じ名なれども百年
のあなべさまにあきるまでもとゝひ一時おもし車と
もくことゝいふみるきるあらうと俗くたつもの其故又二流
の年ゆゑ再び都にのぼり四地彩ひ京師ゆ登りて
金山後へしくはもゝ今和とは其彩成様のもの文の
初の勇ゆる感しゆゑ其彩の生を付右の通ゆ小
くけへるとゆく奥をしく誠ゆこの文の細ゆとく物ゆ車は流
橋の義のごとくなるべしゆ教孰しなさりのくはもとこの文既
ゆ七十年ゆ解らるゝて八ゆ其人の彩と俗りの義
はなのもゆ愛成割て師ゆ屋外ゆ後りしむる其志

人の親ゆ孝の道を尽して真の成愛するといふ
しはもとゝ小家を本延の成日向へ戻らしゆ対して
言許とゆうとうく殺しぬとゆうゆ東北のこゝゆ極
暑しく南部まで海うゆ為ある日ハ我家の事ゆも先
蒼軒ゆ疏中病ゆ事を解くく慕ゆ後へゆうしと
結しくぞうへし